

知事と県民の意見交換会（由利地域振興局）議事要旨

- テーマ : チャレンジで農林業の未来を拓く
～地域と共に歩む農林業の新たな挑戦～
- 日時 : 令和3年7月9日（金）10:00～12:00
- 場所 : 【視察】 株式会社岩城町農園 岩城営農発電所
【意見交換】 岩城会館

- 参加者 : A氏（中三地園芸メガ団地）
B氏（TOYOSHIMA FARM）
C氏（有限会社あぐり大内）
D氏（株式会社岩城町農園）
E氏（有限会社折林ファーム）

- 佐竹 敬久（秋田県知事）
工藤 輝喜（由利地域振興局長）

視察

岩城町農園 岩城営農発電所を視察。

知事挨拶

市町村長や団体の会長との会合では業界全体のことを伺っているが、やはりこれからは現場で活躍されている若い方々の考えなどを踏まえないと県の机上で考えた政策と現場とがマッチングしないことがある。これからの展望あるいは行政に望むことをお聞きし、政策へ反映していきたい。

これからの秋田に重要なことが三つある。

一つ目は、エネルギーである。菅総理が2050年までにCO₂ゼロエミッションを目指すことを表明した。これからは化石燃料の石油、ガス、石炭を用いた発電所は最終的にはなくなり、原発も多くは造れないとなると、太陽光、風力、地熱、バイオマス、水力などの再生可能エネルギーが主となる。秋田は日本でも有数の再生可能エネルギーを導入している県であり、強みとなる。

二つ目は、森林である。いくらCO₂を出さない発電をしても人間生活からCO₂は排出されている。CO₂の吸収は森林が担っている。秋田は森林県であるが、現在、山が荒れているため、今後は山の若返りが必要である。若返りの際、伐採した原木を木材産業でどのように活用するかが課題となるが、現在、原木の価格が高くなっているため、チャンスと考えられる。

三つ目は、地球温暖化により食料の生産が大変厳しい状況である中、本県は食料供給県であるので、農業、食料生産については強みとなる。

時代は、再生可能エネルギー、森林、食料供給、これにデジタル化をどのように組み合わせ、次の秋田を創り上げていくかであり、まさに、若い方の感性や知識にかかっている。

本日のお話を聞いて、少しでも皆さんの御意見を踏まえた事業や政策につなげられればと思う。

参加者自己紹介

(E氏)

折林ファームは由利本荘市の松ヶ崎地区にあり、ほぼ全域中山間地域である。作付規模は水稲50ha、大豆14ha、蕎麦18ha、春植えたまねぎ1.1ha、馬鈴薯0.5ha、長ネギ0.5haとなっているほか、比内地鶏13,000～15,000羽を飼育している。通年雇用の従業員が10名おり、平均年齢は35歳、昨年採用した高卒と今年採用した大卒の子がいるので大分若い労働力となっている。特徴としては、私も含めて全員非農家、兼業農家の子が1人いる以外は、農業未経験者で、新しい形での農業に可能性があるかを模索している。

(A氏)

平成27年にUターンしてきた。両親が小菊、水稲、トルコギキョウを栽培していたので、新規でダリアの栽培を開始した。小菊を2ha近くやっており、トルコギキョウをハウスで200坪、ダリアを17aくらい露地で栽培している。水稲は6haほどである。雇用に関しては小菊のほうでアルバイトを5名程度雇用している。

(B氏)

秋田県の未来農業のフロンティア育成農業研修果樹コースを卒業して、ぶどう農家になった。今年で6年目になる。現在1haのぶどう畑をやっており、黒ぶどう、白ぶどう合わせて6品種4,000本の苗木を植えている。採れたぶどうをジュースやワインに加工してもらい、それを自分の名義で販売する事業を行っている。

元々ぶどう農家というわけではないが、どんな農業をやろうかと考えていたところ、他県のワイナリーを見学した際にその姿に感動して、地元と同じようなワイナリーを造りたい、そういう思いからワインぶどうを始めた。3年以内を目標に地元の矢島に同じようなワイナリーを造ることを目標に頑張っている。

(D氏)

由利本荘市岩城で原木しいたけを生産している。原木しいたけだけでいうと年植菌8,000～10,000本、ほだ木で40,000～50,000本ぐらいの生産規模。乾燥しいたけがメインなので800kg～1tぐらいの生産量だが、秋田県の生産量はもう2tを切るような状況なので、乾燥しいたけでは県内1番かなと思っている。

(C氏)

元々の仕事は菊地建設という建設会社を営んでいた。15年前、建設投資が厳しくなり、これからの除雪の作業などに向け、どうやって従業員を維持していくかと考えたときに、決して生半可な気持ちではなく、思い切って農業に参入しようということで会社を設立した。数々の失敗を繰り返してようやく軌道に乗ってきたというところである。

意見交換（前半）

(局長)

皆さん、様々な分野で新しい取組をされている方々なので、まずは経営中での品目

や販売の工夫、最新技術の活用などについて、お話を伺いたい。

はじめに、折林ファームのEさんより業務用たまねぎの生産・販売に取り組んだ経緯や販売面での法人連携に関する現状の手応えなどについて伺いたい。

(E氏)

水稲、大豆、蕎麦など各種土地利用型の作物も当然栽培している。私は先程お話ししたとおり農業外から来て、首都圏では営業関係の仕事をしていた。農業に携わってちょうどまだ10年目である。その中で春植えのたまねぎに着目して8年目になるが、現状としては作付面積1.1ha、西目の方、市をまたいでにかほの方、県もまたいで岩手県の花巻の方、福島県の白河の方と広域で連携している。なぜ、このような形で栽培しているのかというと、大手の外出チェーンや、加工業者の方、昔の営業時代からお付き合いのある方々から、産地のリスクを分散しながら小規模で確実に納品のできる、よくいう「顔が見える農産物」を納入してほしいという話があり、私たちの中山間地域で栽培面積が少ないとなかなか大手さんには相手にされないことが多いが、そういう形からのスタートで良ければ、逆に使ってくださる実需者の方々と一緒に成長できるのではないかということで今の体制でやっている。

今、松ヶ崎地区ではほ場の基盤整備事業をやらせてもらっているのですが、当面は水稲の面積と地域の労働力の確保の面より2～3年は水稲メインの状況が続くと思うが、その後は並行して行っている産地化の取組の中で2～3年後に面積4haを目指し、通年で東北エリアからたまねぎを供給できるような産地連携をしたいと思っている。

最新技術としては、そのような広域連携と地域に法人を作りながらやっていきたいという希望に加えて、若手がいるので4年ほど前から出始めの農業用ドローンを活用した基盤整備を行うほか、ほ場については水管理システムや地下灌漑システム等を構築し、汎用性のあるほ場を作っていく。

(局長)

次に、Aさんにお伺いする。メガ団地でのキクの栽培に加えて、ダリアとトルコギキョウの栽培に取り組んでいるが、メガ団地、個人経営それぞれの将来展望は、どのように考えているか。

(A氏)

メガ団地としての売上目標が1億円ということで、皆さん規模拡大をしている。小菊はお盆の時期などに必ず需要があり続けるので、小菊を中心としつつ、ダリアに関しても新品種が出たり、観賞用としても需要が高いので、その中で売れるものを選別して売上を上げていきたいと思っている。

将来の展望としては、軸は小菊において、ダリアやトルコギキョウについてもある程度は売れているが、これら二つに関しては、別の品種や作物にする可能性もある。現状は、何年かおきに新しい草花を試してはやめてを繰り返している状況なので、ダリアやトルコギキョウも軸になっていくかは栽培しながら見極めていきたい。

(局長)

次にBさんにお伺いする。地域の活性化を目的にワイン用のぶどうの栽培、さらには、ワイナリー経営に挑戦している。県内では前例のない取組であり、これまで苦労された点や今後必要とされているサポート等について、伺いたい。

(B氏)

私が醸造用ぶどうを始めたきっかけは、6次産業化による地域の活性化という点である。ワイナリーというのは6次産業化のお手本のようなものである。1次産業の農業でぶどうを栽培することで、農地、遊休地の活用だけでなく、雇用の創出にもつながる。それを加工することによって県内に新たな商品ができあがり、ワインを飲むという新たな文化が根付くと思っている。そして何よりもワインというのは、ペアリング、料理との相性が大切であり、他の県産食材のPRにもつながると考えている。お酒なので、飲んだら泊まる所も必要だし、公共交通機関との連携もできると思っている。そして、何よりもワインを一番美味しく飲む方法は、ぶどう畑を実際に見ながら飲むということで、それこそ観光業に大きくつながるものだと考えている。

県で掲げている高質な田舎というテーマを実現できるようなワイナリーを目指しているが、そういった加工施設となるとどうしても多くの投資が必要となってくるので、各種事業や融資を活用できるような事業体を目指しながら今後もやっていきたい。

(知事)

現在は委託しているのか。

(B氏)

現在はワインを販売しており、ぶどうも私が作っている。その加工は他のワイナリーやジュース工場にお願いしている。

(局長)

次にDさんにお伺いする。現在、国産しいたけの多くがほとんど菌床栽培で行われている中でソーラーシェアリングによるしいたけ栽培を行うなど、原木栽培でしいたけを生産しているが、原木栽培へのこだわりや想いを伺いたい。

(D氏)

父がやっていたからというのが一番の理由ではあるが、生まれ育った地域の方を見ても、昔はしいたけを家の裏で栽培するということが一番多かったと思う。非常に身近なものだったと思うが、労働が過酷な割には実入りが少なくなってきたこともあって、効率のいい菌床しいたけを栽培する人が増えていったのは当然だと思う。菌床しいたけがなければしいたけを食べる機会が今はないと思うので、それを否定することは全くない。なくなっていくものを止めるのは簡単なので、できるところまでは原木栽培をやりたいという気持ちである。

(知事)

今はどこで販売しているのか。

(D氏)

主にギフトやお土産屋、アンテナショップである。

(知事)

乾燥も行っているのか。

(D氏)

乾燥で販売しているのが一番である。

(局長)

次にCさんにお伺いする。複合作物として、日本なしの「秋泉」とぶどうの「シャインマスカット」で、秋田県初の根圏制御栽培を導入して、新規参入ながら、2年で販売に至り、注目されている。この技術の手応え、今後の普及の可能性について伺いたい。

(C氏)

今も主力は水稲だが、収益性の高いものを考えたときに果実をどこかでやれないかなと思っていて。由利地域振興局との協議の中で、根圏制御栽培に取り組んでみようという話になった。県内初ではあるが県外でやっているところはあって、栃木県が一番近かったので、栃木県で研修を積んだ。最初話を聞いたときは「3年目に実がなります」と話をされたが、桃栗3年柿8年、梨となるともっと時間がかかるんじゃないかと思ったが、2年目で実がなった。規模は大きくはなく、現段階では100坪のハウスに50本の梨、50本のシャインマスカットというような形でやっている。

根圏栽培とは、簡単にいうと根域制御の栽培方法で、普通の土の上に根を張る分だけ土を盛ってそこに株を植えていくだけであるが、この栽培方法のいいところは、木がそれほど大きくならないため、ハウスの中で非常にコンパクトな栽培ができるということで、労働の負荷がだいぶ軽減できる。Y字に張った枝から収穫するため、全てに手が届くところが一つの利点だと思っている。

続いて制御栽培とは、灌水システムである。自動灌水装置をつけて直接根の部分に水をまくというもので、一番投資が必要なところがこの部分である。水のやりすぎ、水不足を防ぐということで、適度な潤いを求めて栽培できるということは確かだが、やはり県内のデータがないので栃木県とは違う条件の中で試行錯誤しながらやっている。新聞などで報道していただき、反響があり、今日も見学に来ているので、おそらく広がりを見せるのではないかと可能性を感じている。

(知事)

Eさんのところは、ほとんどが非農家ということだが、うまく地域の方々と馴染んでいけるものか。

(E氏)

今は、馴染んでくれていると思う。やはり若い方々が来ると地元の70代80代の方からすると孫よりも下の世代ということで、かわいがっていただいている。

(知事)

若い方が先進的なことに取り組んでいるということで、気候変動など苦労は大変あると思うが希望が持てるなと感じた。若い方が前を向いて取り組んでいることに感動した。

これからの農業は先進的な技術やマーケットなど、いろいろな面の組み合わせ、マッチングをどのように行うかが難しい問題であるが、何が売れるのかを考える必要がある。かつて複合経営がうまくいかなかったのは農家が作りたいものを作っていたからであり、それでは実際に売れるかどうかは分からない。近年、本県の米以外の農業出荷額の伸び率が

高いのは東京市場のニーズを基に出荷しているからである。

枝豆日本一はキリンビールが枝豆が足りない、いくらでも売れるというニーズがあるとあったところから発想した。私自身が東京の市場に行く中で、何が必要で、何が足りないかが分かった。情報化の中でそういうことをうまく捉えていく必要がある。

また、しいたけは菌床の方が中心だが、菌床が増え、原木に別の意味で価値が生まれてくることで、プレミアム感が出るので、うまく捉えてやっているなど関心したところである。

ワインは独自のブランドなのか。

(B氏)

TOYOSHIMA FARMとして、私の名前で販売している。

(知事)

どういう戦略でいくか、高級志向でいくか、一般の普及品でいくか、生産量が少ないとすると丁寧に作って、超高級ワイン、プレミアム感を出すといい。

(局長)

次に、農業現場における共通課題について皆さんから御意見をいただきたいと思う。他産業との賃金、休日格差を解消するために取り組んでいることや、農業経営の効率化、付加価値化のために必要なことを伺いたいと思う。

折林ファームのEさんにお伺いする。従業員の平均年齢が若くて活力に溢れているように見受けられる。どのようなところが若者を惹きつけていると思うか。

(E氏)

従業員10名に若手が含まれるようになるには、私が入って10年の間、先代が倒れてから若手の従業員を引き受けるまで紆余曲折あったが、一つは私が入った翌年に入ってきたくれた高卒の子たち、人の資質によるところが最初は大きかった。若い子たちと一緒に、他産業との賃金や休日の差を真っ先にどのように変えていくのかに日々取り組んでいる。

まず、賃金を上げるためには当然会社の売上を上げなければならない中で、自分たちの中山間の矮小な農地、他よりも生産力の劣る農地、なおかつ米主体でずっとやってきた地域で新しいものに取り組むときには、当然地域の反発がある。その中で、新しいものをどのようにして地域に売り込んでいくかというときに、たまねぎについても話したように大手、中小、個人の方々も含めてまず現地に来てもらい、私たちを知ってもらって、自分たちが作っているものに値段をつけてもらっている。

また、私が入ったときは休日があってないようなレベル、普通の個人農家と同じで雨が降ったら休み、降らなかつたらずっと作業ということが当たり前で、人の出入りが激しかった。そこも含めて若い子たちとどうすればいいか、家族のいる人で土日休みたい人、まだ独身で平日休みでいい人がいる中で、毎日のように休日の話をしながら、今は年間のシフトを出しながら、個人の休みたい日、有給の5日取得の義務化などもあるので、今は月のシフトの形は出すが、従業員がそれぞれ栽培している栽培体系、現場の状況に合わせて、基本の休みに有給を足しながら休んでいるという形になっている。休みに関してはここ最近不満がなくなってきた。

今後、更に若手の従業員を雇っていく、もしくは規模を拡大していく、地域の農業法人与自然と連携していくという中で大事になっていくことは効率化だが、会社のソフト面を変えて

いくのと同時進行で地域の景色や矮小農地を解消しようということで、基盤整備事業を採択いただいて、面工事で令和4年まで、完成が令和7年の予定だが、地域の皆さんが農地を貸してくれて応援してもらおう私たちが地元になにができるかということを考えてながらやっている。

正直今の松ヶ崎地域で作るものに付加価値をつけようと思ってもなかなかつけられないが、そこに携わってくれる方々に松ヶ崎、折林ファーム、この後広がっていく岩城地区の法人連携など、様々な連携に付加価値を見出してもらえるようにやっているのだから、これからも続けていきたいと思っている。

（局長）

地域の中では後継者の目処が立っていない法人も多く、事業承継が課題の一つになっている。スムーズに承継を進めるためのポイントについて考えを伺いたい。

（E氏）

スムーズな事業承継は、農業分野ではなかなか難しいと思う。元々農家でやられてきた方、新規で入る方も現場の作業が忙しくなるので、私の継承については、正直今の農業で培った経験で継承がスムーズにいったというよりは前職、前々職での労務管理の経験が大きいので、賃金や会社のソフト面のところがうまく回っていて継承がすんなりいくということを感じている。

従業員の中から継承したいと言ってくれる子が出てくるのが一番望ましい形とは思いますが、私が地域で法人連携をもっとしていきたいという理由の一つに、どうしても現場が好きな子たちにこれから経営に入ってほしいと言うと尻込みしたり、それが負担になる子たちも当然多いので、地域で販路を共有しながらやっていく法人間の連携の中で、長い目で見れば法人が法人を引き継ぐような形をこれから模索していかなければならないと思っている。法人であれ組織であれ、地域の中で連携している仲間が増えるとその中で初めて経営に特化した突き抜けた経営者が出てきてくれれば、その時にはまとめるような形がとれるのではないかと思います。

（局長）

次にAさんにお伺いしたい。中三地メガ団地では30～40代の方が多く、新規就農の時にメガ団地に加入した方が多いと聞いている。今後の担い手を確保するために魅力的な農業に必要なものは何か。

（A氏）

メガ団地に同世代の人が入ってきたときは、最初の敷居が低かったというのが一番。補助金により、メガ団地に作業舎を造ってもらったので、出荷の際の手間だったり大きな機械の購入というのがほとんどなく、低投資で参入できたのが大きかったと思う。

今でもその時に参入した人は自分でトラクターを買ったりというのは二の足を踏むことが多い。夢プランもあるが、それでも大きな投資はしたくないというのが本音としては多い。補助金などをいただいている中で、これ以上は求めすぎだとは思いますが、初期投資が少ないということが新規参入につながるのではないかと思います。

（局長）

地域の女性を多数雇用しながら大規模経営を実現しているが、雇用を確保するために工

夫していること、雇用されている方にとって働きやすい環境をつくるためにどのような工夫をしているのか伺いたい。

(A氏)

今、女性の方々は基本的に知り合いや知人に声をかけて働ける方をお願いしている。掛け持ちで他の仕事をされている方もおり、時間を自由をお願いしている。大体仕事の始まりは8時半からだが、10時で上がってしまう人や午前だけ働く人もいるので、何曜日から何曜日まで働くという形ではなく、何日頃から作業をスタートするのでどれくらい来ることができるかLINEなどで声をかけて来られる人にだけ来てもらっている。

昨年度は、緊急事態宣言で学校が休みになり、お孫さんの面倒を見なければならないということでしばらく来られなくなった人もいた。そのような時は自分たちの作業時間が長くなっても自分たちでどうにかするか、どうしても人手が必要なときはシルバー人材センターなどをお願いした。

外での仕事は割と高齢の人が多いので熱中症の対策として、背中の部分まで覆う帽子など作業に必要なものは用意している。力仕事の際は男性の人手が必要だが、シルバー人材の方は高齢すぎて難しかったりするので、知り合いの男性の方で、大工をしている兄の建築現場のアルバイトとシェアする場合もある。

(知事)

折林ファームの構成メンバーの中に、県外の人はいるか。

(E氏)

今年入った大卒の子が兵庫から来ている。コロナの移動制限等の関係で4月12日から来ており、地元の空き家を紹介するなど住居の不安がないような形で他県からの移住者と一緒にやりたいと思っている。

(知事)

どんなふうに情報が伝わって秋田に来たのか。

(E氏)

今回の兵庫の子は、秋田県に農業経験希望と出していたようで、由利本荘市の中でうちのところを見に来てくれて、うちに来ることになったのは、農業の話をしながらその子の不安に思うようなことを一個人として聞いているなかで、本気で農業をやりたいのならうちに来ないかというような話で今に至っている。

(知事)

メンバーの中で婚姻率はどうか。

(E氏)

去年の高卒で入った子と今年大卒で入った子以外は結婚している。

(知事)

県南で法人を作って、そのメンバーの婚姻率が高い。法人で名刺を持たせると非常にいい。農業が企業となってそこの従業員となると、お嫁さんの親御さんも安心するという。

県外から大卒が来るというのはすごい。

これから法人が大きくなるには相当の設備投資が必要であるが、スマート農業の設備は高い。最初から大きく投資するのは難しいので、力がついてから投資するというのが普通。その力がつくまで行政が後押しをし、自分の力がついてから制度を使って設備投資をする。うまくいっている例はそのようなやり方が多い。

(知事)

今、メガ団地には何人いるのか。

(A氏)

30代5人、40代が2人、50代以上が1人である。

(知事)

法人になってくるとシステム化されており、パソコンが使えるのは当たり前である。農業高校でもコンピューターの授業に相当時間をとっている。ある意味、本県は製造業より農業の方がIT化が進んでいる。若い方が多くいて頑張っているのは希望がある。

意見交換（後半）

(局長)

本日のサブテーマが「地域と共に歩む農林業の新たな挑戦」となっている。皆さん、農業に取り組み始めたきっかけは様々だと思うが、共通して、「地域のコミュニティ」とか「地域農業」を盛り上げていきたいとの熱い思いを持っていらっしゃるように感じている。地域全体を考えた中での農業の役割や可能性について伺いたいと思う。

あぐり大内のCさんにお伺いする。建設業から農業にチャレンジし、水稻の作業受託を通じて地域の水田の維持に貢献されている、地域内の水田の有効活用を含めた今後の経営展望について伺いする。

(C氏)

私どもが水稻に関わったのは8年前くらいから。こちらが思ったよりも順調に受託が増えていき、あっという間に30町歩になったという感覚。それはそれで中山間地域の厳しさというものと今対峙しているような状況である。集落営農が進まないような地域であったことから、我々と一緒と言ってもなかなか御賛同いただけなかったという中で広がってきて、これから少しずつイメージが変わってくれば、もっと効率の良い作業ができていくのではないかと期待しているところである。

昔は農業をやりながら冬に出稼ぎに行ったり、除雪の作業をしたりというのがあったが、今はなかなかそういうこともなく、私どもも冬の仕事を確保しながら従業員に安定した生活を送ってもらえるような形をつくっていかねばいけないなと思っている。そういう意味では、これから周年農業に向けた投資をしながら、しっかりと地域の農業を支える一端を担えればなと思っている。

(局長)

Dさんにお伺いする。他の仕事をされていたということだが、外から見て自分の故郷や、農業にどのような印象を持っていたか。また、地元に戻って就農されて新たに目標にしていることはあるか。

(D氏)

地域としては米が多い地域だったので、サラリーマンをしていますが週末は農業を手伝うのが当たり前、そういったものが普通なのかと、一般企業とは違うのが農家だなとイメージしていた。今、戻ってから農家をやって原木しいたけを作っているの、山に入って木を切るといことから始まるが、そういった面から見ると非常にいい仕事だなと思う。皆さんが山に入らなくなってきたが、岩城の滝俣という地域は山に入る人がまだ多く、仕事としてやっている人がいる。そういったことに携われているというのは、生きがいにもなるし、地域のためにもなっているのかなと思う。

(局長)

Bさんにお伺いする。ワイナリー経営を通じて、実現を目指している地域の未来像について伺いたい。

(B氏)

ワインの一つの特徴として、アグリ大内さんのようにイチゴなどについては、最近ハウスなどの設備投資によって、どこでも高品質なものが作れる時代になってきた。しかし、あれをぶどう（ワイン）でやってしまうと意味がない。ワイン用のぶどうというのはその土地を体現するという意味合いが強いので、たとえ雨が多くても、それを現したワインになるし、そういったものを作らないと意味がない。ここでカリフォルニアのようなワインを作って美味しくても意味がないと私は思っている。そういう意味では、ここで世界で通用するようなクオリティのものができたとする、この地域（矢島町）にはすごく美味しいワインがあると、地域のブランドの向上にも貢献できる可能性が農業にはあると思っており、そのためにワイン用のぶどうというのは適していると考えている。まずは、県内を中心に認知度を高めていけたらと思っている。

(知事)

建設業から農業に進出しているところが多い。従業員も農業の方が多し、土を扱うという点では、近年は、農業と建設がうまくマッチングしており、そういうところが増えてきている。大規模にやるにしてもバックに建設業があるから資金的な面での安心感もあるし、バックと従業員、季節の変動のバランスがとれる。これから建設業の方が農業分野に参入していくことは結構多くなるだろう。

雄勝の院内に原木しいたけがいっぱいあったが、かなり辞めている。高齢化のため原木を山から持ってくるのが大変であるが、原木を確保するエリアはある程度目処がついているのか。

(D氏)

切りやすい場所にあるわけではないが、私がやれる範囲内には原木はある。

(知事)

ワインは日本酒と違って、味わいに影響を与えるのが土地である。高いワインでも安いワインでも特徴があって、安いからうまくない、高いからうまいというものでもない。ブランドというのは地域とのマッチングが重要で、地域ごとに違っている。大量生産でない地ワインというのは、他の食、地域の観光資源と組み合わせることによって、ブレイクス

ルーすることができるので、ぜひ頑張っていたきたい。値段ではなく、イメージが大切なので、スペシャリティーを狙ったワインを作っていたきたい。

ところで、ぶどうはどこで作っているのか。

(B氏)

畑は矢島町の金ヶ沢にある。今、新たに畑を広げようとしているのは花立地区である。花立は馬に乗れるところがあって、少し行けばフォレスト鳥海があって、鳥海山の入り口であり、土田牧場さんもありコテージもあって、星が日本で2番目にきれいに見える夜景もあり、素晴らしい土地だ。そういった中でぶどう畑と一緒に歩むワイナリーがあれば必ず、知事のおっしゃっているスペシャリティーのある環境が整うと私自身思っている。そのために他の農業生産者さんやシェフと連携して、メーカーズディナーというのを開いているので、そういった方々と今後も連携しながら、実現させていきたいと考えている。

(知事)

花立はイメージがいいので、頑張っていたきたい。

(局長)

これまでに触れることのできなかつたことの補足や御提言のある方は御発言をお願いします。

(E氏)

先ほどから広域で連携しているということでお話しをさせていただいたが、比内地鶏なども沖縄の方々ともやりとりさせていただいている。コロナがなければ地域に来ていただいていた。

振興局をはじめ、様々な補助をいただいているが、法人の連携を作っていく過程に対してどういった支援があるのかは別にしても、今の決まっている補助金などは制約が出てくるので、新しい形に柔軟に対応できるような仕組みを作る段階で、このような知事との懇談でもいいし、統括する課の方々とお話しする機会などを作っていただければありがたい。決まってしまった予算ではその中でしか使い方を模索できない。ここがこう変わってくれたら使いたいのにということが多々あるので、作り上げていく過程でお話しする機会があればと思う。

(D氏)

特用林産の事業要望調査が来るが株式会社単体で臨めない。森林組合や団体でなければ土俵に乗れないような事業だけだ。株式会社単体で臨める事業があればと思っている。

それから、耕作放棄地が増えてきている。林地化を急いだほうがいいのではないかと思う。水田として放っておくより、お金もかからないと思うし、私はしいたけをやっているんで、いくらでもクヌギを植える。平場にあると作業も楽になる。私は耕作放棄地は先を考えれば山に帰したほうがいいのではないかと思う。私たち世代はそういう風に考えていかなければならない世代と思っている。そういうのが県としてあれば非常にやりやすく、それでしいたけ農家も増えてくれればと思う。

(A氏)

農業だけでなく建築の方でも人の確保が難しくなっている。現在、大工をしている

兄と人手をシェアしているが、その時思ったのが、リゾートバイトではないが定住者ではなく短期的にこちらに来て、常にアルバイトで日雇いのように、この日は農業をやってこの日は大工をやるみたいなことができるような、掲示板やそういった何かがあれば人がくるんじゃないかなど。空き家や簡易宿泊所みたいなところに2か月だけ住んで、またその人は別の所に行って、またそこに新しい人が来てみたいなことができれば、定住はしてもらえないかもしれないが労働力の確保ができるのではないかな。そういったものがあればいいと思う。

初期投資の話につながるが、新規就農者は最初から大きく始めたくない。ちょっとだけ兼業でやりたいという人がいる。トラクターなどの大きいものは用意しづらいと思うので、シェアして使用料を支払うような仕組みがあれば、新規に入る人もいるのではないかなと思う。

(B氏)

ワイナリーのために北海道や山形県によく行くが、国の補助金に対して県からの上乗せというのが結構有り、山形の事業体では自己負担が総額費用の5%くらいという補助の制度があって、それがスタートアップに役立つような面があるので国からの補助金に少しでも上乗せがあればありがたい。

私は、県の事業(補助)を利用していただいている、事業報告を求められる。すごく細かいところまで聞かれるが、それがフィードバックはされずに、報告して終わりという状況である。事業報告で集まったデータをこちらに開示して、その後の発展につなげてもらえるなら良いし、そこまで業務が多くてやれないというのであれば、もう少し簡単な事業報告書にしてもいいんじゃないかなと思う。

(C氏)

県では県立高校の統合を進めていると思うが、この地域で実業高校が減っている。農業は1学年20人弱、建設業に至っては1学年十数名くらいしかいないという話を伺っている。私どもも学歴にこだわって採用しているわけではないが、それでも早い段階から興味を持っている人が多くいてくれるとうれしいと思うし、ぜひ、学校の再編と同時にカリキュラムの方も御検討いただければと思う。

知事総括

今、要望や意見をいただいたが、なるほどと思うものがある。こういう場での意見が制度の改変あるいは新しい制度を作るときに役立つことがある。今の話を担当課にも伝え、検討していく。

国の事業への嵩上げ補助は、県の財政に余裕がない中で、効果の高いものについてはやっているの、うまく活用してほしい。

学校の問題は、普通高校に集約する話もあったが、農業高校と工業高校を一緒にしてしまうと名前が分からず、特に誘致企業などは工業科があっても分からないので、もう少し工夫があってもいいと思う。

意見については、持ち帰って検討させていただく。(了)